
自らを罪人と称する貴族と武士として生きる少女

佐倉風弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自らを罪人と称する貴族と武士として生きる少女

【Nコード】

N7232Y

【作者名】

佐倉風弦

【あらすじ】

かつて平民の娘を愛して心中を図り、死ぬことができずに自らを罪人と称する夜羽。

彼に声をかけたのは、呉羽という娘で彼女は自分の妹の礼羽を護衛として雇ってほしいと申し出る。

彼女の思惑とは……。

ブローグ

貴族の家に生まれた彼は、裕福な家庭であつたからこそ忙しい親と話す機会など全くなくして親の愛もほとんど知らずに育つこととなつた。それ故か、彼にとって親は恐怖の対象でしかなかった。礼儀、勉学を強要し近所の子供と同じように遊ぶことも許されなかつたせいで不満ばかりが募り、普通の人間とは言い難い成長を遂げた。

普通の人間というものを詳しく説明することなどできないが、彼が普通の人間ではないことは断言することができる決定的な事実であつた。普通の人間ではないと言っても何も殺人を平気で起こしたり妙な薬に手を染めたというわけでもなく、危険思想者ということもなかった。いや、あるいは危険思想は持っていたかもしれない。

彼は表向き、社交的で人を惹きつけるような存在だつた。貴族に生まれただけあり、容姿はその辺りの男と比べて端整であつた上、彼の最大の特徴がその巧みな話術だつた。彼の話術は他の人間のものとは違い、人を惹きつける不思議な魅力をも有していた。その容姿だけで十分に女を惹きつけるが、その魅力のある話術で男の友人をも多く獲得することに成功し、妬まれるという失態を犯したこともない。

勉学にも長けており、社交性にも優れていただけあり、彼の親も厳しくも満足をしていた。貴族の親でなくともそうだが、優れた子を持つと親は満足するものだ。彼ほど優れた人間は探し回っても早々いないだろう。

けれど彼は、ただ一度大きな失態を犯してしまふ。

親に薦められ、何度も様々な貴族の屋敷に招かれることがあった。貴族の娘と交流を持たせようということだったらしく行く先々で貴族の娘ばかりがいた。貴族の娘も例外ではなく彼に惹かれた。彼の家は貴族のなかでも特に高貴だったので他の貴族の娘も彼の妻になれば、さらなる高みを得ることが出来る。もちろん、頭の良い彼がそれを知らないはずはなくいつも嫌悪感を覚えた。自分が貴族でなければ、彼女らは見向きもしないのではないか。本当は自分のことなぞ何とも思っていないがさらなる上流の家系に入りたいがために自分が好きな振りをしているのではないか。そんなことばかりを考えてしまい、どの娘も愛することができなかった。

しかし、何も一切恋心を抱かなかったわけではない。ただ一人、本当に愛した女性がいた。

相手は自分に使える侍女であった。平民は貴族とは結婚できない。それが分かっているながら自分に想いを寄せてくれる彼女をとて愛しく想った。彼女ならば、たとえ自分が貴族でなくとも自分を愛してくれるに違いないと確信した。彼はとても頭が良いので彼の考えに狂いなど存在しない。

だが、大きな問題があった。貴族と平民。主と侍女。これが二人の関係である。この二人の恋が許されるはずはなく最も愛しい女性と結ばれることができない。途方もない苦痛を覚えた。生まれ落ちて初めて心から愛した女性を簡単に諦めきれずもなく、ある決断をした。

心中。

彼は、彼女と共に命を絶つことに決めた。親に対しても他の者に對しても優れた人間を演じなければならぬことも疲れきって上、

愛する女性と結ばれることすらも叶わない。これだけの理由があれば、十分自らの命を絶つに足るのでないか。その心中の方法は二人揃ってある薬を大量に飲むことだった。間違いなく致死量の薬を飲み、命を絶つ。

しかし、ここで彼は自分を罪人と称することになる大失態を犯してしまう。

彼を想って何の迷いもない侍女。そして彼は、あるうことが直前になって死ぬのが恐くなったのだ。それ故に彼は薬を飲むことができなかった。だが、侍女は薬を飲み、命を絶った。自分だけが死ななかった。最後の最後に彼女を裏切ってしまった彼は自らを罪人とした。

罪人　。

第一章

小さなうどん屋があった。周囲には他の建物は見えず、すぐ傍に山が見える。寂しい場所であったが登山客には人気で老夫婦が細々と経営している。古めかしい建物でいつそのこと立て直した方がいいのではないかと思うほどで豪勢なものを好む貴族は一切寄り付かない。たまたま通りかかったところで、汚い店だとも吐き捨てて通り過ぎる。その反面、値段も安く平民には手が出やすいだけあって正午には多くの平民で賑わう。

質素な作りの店内で座布団に座り、うどんも注文しないでうとうとしている青年がいた。端整な容姿、質の良さそうな着物。見る限り、貴族だと思わせる風貌である。この店を好き好んで訪れる貴族は滅多にいない。珍しいものだ。そんな彼に平民達はちらちら目を向ける。この場に貴族がいることが不思議でたまらない。なかには彼の端整な顔立ちに惹かれる女性も多く存在した。そんななか、店主である老婆が何ともゆっくりした足取りで彼の近づき声をかける。

「夜羽さんや。今日はうどん食っていかんのかいな？」

夜羽と呼ばれた青年は、今にも眠ってしまいそうなほどうとうとしながら言葉を発する。

「後で食べる」

「店で寝るのはそろそろ勘弁してくれんかのう」

「ここは落ち着く。家ではまるで落ち着けんからなあ」

これ以上何を言っても無駄であると悟ったらしい老婆は店の奥へ

向かって歩き出す。それと入れ替わるように若い娘が彼の元に来る。質素な着物から平民であることが明らかだが、その辺りの貴族の娘と比べても図抜けて美しい娘であった。長く艶やかな髪はまるで滝のようだ。これが平民であるのが不自然に思えてしまうほどの美しさ。娘は愛想笑いを浮かべる。

「隣、よろしい？」

「よろしいが」

「では、失礼するわね」

隣の座布団に正座する娘。しかし、こうも堂々と貴族の隣に来る平民の娘は早々いない。それなりの度胸はあるようだ。大抵の平民は、貴族相手に無礼なことをしてしまうことを恐れ、なかなか声をかけてくることもない。

「あなたは変わり者なのかしら？」

「まあ、そうだろうな」

彼は愛想笑いを浮かべた。人と接するために意図的に自然に愛想笑いができるようになっていた。その時彼は、今まで話した相手とこの娘は何かが違うと感じていた。恋などではない。恋愛の経験は一度、ありその感情とは別物である。しかし、この娘ならば平民でありながら貴族の心を掴むことは容易いのかもしれない。最も、彼の心は動かなかったが。

「あなたの名は？ 私は呉羽」

「我は夜羽」

「女の子みたいな名前ね」

呉羽は、口元を手で押さえながらくすくす笑う。

「よく言われる」

呉羽は興味深そうに夜羽の姿を見据える。微笑を浮かべたままだが、人の本質を探ってしまうのではないかと思わせる。やはりこの娘は、ただの娘ではない。ようやく観察は終わったのか、平民とは思えない美しい声を風にのせる。

「ねえ、あなたは何者？」

見れば分かるだろうが夜羽は貴族である。しかし、彼女の求める答えはそんなものではない。本当の正体……人それぞれにある何か。その真剣な眼差しは隠そうとしていても、本当のことを言わずにはいられないもので正直に答える。

「我は罪人だろうなあ」

苦笑いを浮かべて肩を竦めた。彼女は納得したように頷く。

「それが、あなたの正体かしら？」

「うむ。間違いないだろうな」

自らを罪人を称した。自分は罪人であると夜羽は心の底から思っていた。優れた人間でも頭の良い人間でもきれいな人間でもない。罪人。自分に似合う言葉はそれ以外に存在しない。そう考えて疑っていなかった。もし自分が罪人ではないと言うなら、世の中の強盗も殺人鬼も罪人ではないだろう。

「罪人さん？ あなたにお願いがあるの」

呉羽は朗らかな笑みを浮かべた。通常では、平民が貴族に頼みごとなどできるはずがない。そんなことをしてしまえば、どうなるか分らない。捕らえられて鞭打ちにでもされるかもしれない。しかし、夜羽の目の前の人物は完全にそうならないと踏んだのだ。夜羽がそのようなことをしないと見破った。事実、夜羽は平民に頼みごとをされても腹を立てることもない。

「何だろうか？」

愛想笑いを崩すことなく聞き返した。常に笑顔を浮かべているのは動作のないことだ。たとえ、心のなかが暗い感情に埋まっていたように。仮に愛想笑いが得意でなくとも、今この場では自然に笑顔を浮かべることができただろうと確信した。

「家に来てくれる？」

呉羽の家はやはり、貧乏くさいボロボロの小さな一軒家であった。玄関は非常に狭く、一度に二人ずつ入るのが限界だろう。部屋のなかはきれいに掃除はしているようだが、天井を見上げると黒い汚れが目立ち、おまけに穴まで開いている。大雨でも降った日には悲惨な状況になるのは間違いないだろう。

テーブル前の椅子に腰を降ろすと呉羽がお茶を用意してくれた。お茶をすすっていると呉羽が一人の娘を連れて来た。肩まで伸ばした銀髪に狼の耳と尻尾、服装は袴だった。正直、呉羽ほどの美人ではない。それどころか、一瞬少年かとも思ってしまった。しかし、どこか愛らしさもあった。

「この子は妹の礼羽。武士を目指してるのよ？」
「武士？」

女の武士もいないこともない。他の仕事 店の売り子や宿で働くよりは随分稼ぎも良いことから、体力に自信があるならば女子でも武士を目指した方が良いらしい。こういう紹介のされ方……夜羽は何となく予想がついた。

「お願いって言うのは、この子を護衛に雇ってほしいの」

やはり。貴族の護衛というのはかなりの稼ぎを期待できる。それも、対象が上流貴族であるほど収入も上がる。確かにこの家の状態を見る限り、食料を購入するのもままならないと言ったところか。恐らく呉羽はそのため貴族を探していたのだろう。それも自分の頼みを聞き入れてくれそうな。

「まあ、いいが……」

さして断ろうという気も起こらず了承する。むしろ断る必要などない気がした。呉羽にうまくしてやられた気もしたが別に不快感も感じない。礼羽がぎこちなく頭を下げる。

「よ、よろしく頼む」

「ただし、我は罪人だな」

愛想笑いを浮かべる。礼羽の全く意味が分からないらしく小首をかしげるばかりであった。罪人に護衛というのも奇妙なものだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7232y/>

自らを罪人と称する貴族と武士として生きる少女

2011年11月21日09時12分発行